

平成26年度

平和大使長崎派遣事業報告書



明るい世界に はばたく平和

未来に伝える 過去の願い



松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使長崎派遣募集	3
平和大使名簿	5
平和大使長崎派遣行程	7
平和大使長崎派遣帰庁報告会	17
平和大使の報告	18
「未来の人たちへ」	布川 恭大・・・・19
「今、自分たちができること」	白井 悠生・・・・20
「伝えたいこと」	松本 優樹・・・・22
「僕たちが伝えていく」	本間 宏明・・・・24
「平和大使を終えて」	旗谷 吏紗・・・・26
「長崎平和大使として感じたこと」	宮島 加奈子・・・・28
「長崎で学んだこと」	植田 聖杜・・・・30
「平和大使長崎派遣報告書」	合田 健太郎・・・・32
「平和大使長崎派遣の報告書」	早崎 諒・・・・34
「長崎平和大使として学んだこと」	小井土 瑠冴子・・・・36
「長崎に行って」	望月 優衣・・・・38
「私が長崎で感じたこと」	片野 玲奈・・・・40
「平和大使長崎派遣」	和田 晴人・・・・42
「命や身近な物の大切さ」	對馬 悠介・・・・44
「過去と向き合う」	井手 麟太郎・・・・46
「長崎平和大使に参加して」	樋口 明日香・・・・48
「永遠の11時2分」	斎藤 龍秀・・・・50
「平和だということ」	久保田 美咲・・・・52
「平和への架け橋」	紀藤 菜桜・・・・53
「平和大使になって知ったこととやること」	渡邊 龍・・・・55
「私が伝えていくもの」	野中 利悦・・・・57
「長崎平和大使報告書」	築田 真理子・・・・59

新聞掲載記事	・・・・・・・・・・・・・・・・	61
長崎平和宣言（平成26年8月9日）	・・・・・・・・	62
歴代平和大使名簿	・・・・・・・・	70



～ 平和大使長崎派遣事業にあたって ～

松戸市は、昭和60年3月に「世界平和都市宣言」を行い、これまでさまざまな平和事業を実施して参りました。

8月9日、6日の広島に続き被爆69年目の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典が、長崎市平和公園において開かれました。今年は台風11号の接近による影響が心配された中での開催でしたが、式典には米国政府代表として2人目の駐日大使が参列し、諸外国の政府関係者は過去最多の48カ国となりました。このことから、核兵器の廃絶を求める声は世界の大きな流れになりつつあることが感じられます。

そのような中、長崎市長は平和祈念式典の平和宣言の中で、核兵器保有国とその傘の下にいる国々に「核兵器のない世界の実現のためにいつまでに、何をするのかについて、核兵器の法的禁止を求めている国々と協議ができる場をまずつくり、対立を越える第一歩を踏み出してください。」と呼びかけるとともに、日本政府には「核兵器の非人道性を一番理解している国として、その先頭に立ってください。」と求めました。そして「一人ひとりの人々の集まりである市民社会こそがもっとも大きな力の源泉だ。世界の皆さん、次の世代に「核兵器のない世界」を引き継ぎましょう。」と呼びかけました。

近年、式典に参列できる被爆者の方も年々少なくなった状況の中、当時の様子を知る術が少なくなってきたことにより、被爆体験や戦争体験の風化が懸念されるところです。私達は、直接戦争体験を聞ける最後の世代として真実をしっかりと引き継ぎ、未来を担う若い世代に継承することが、今、課せられた使命であると認識しています。

併せて、世界平和都市宣言の理念である世界の恒久平和を念願することからも、世界各地で続く紛争に対しても目を向け、広い視野に立った施策が重要であると考えております。

平和大使長崎派遣事業を通して、松戸市の次代を担う若い世代が、被爆地へ行くことにより被爆の実相や平和の尊さを学習し、また、学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことを期待して、本事業を実施してまいります。

～ 世界平和都市宣言 ～

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

• World Peace City Declaration

[英語]

Mach 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion.

This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nationwide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

• 世界平和都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

～ 平和大使長崎派遣募集 ～

世界平和都市宣言事業 第7回「平和大使長崎派遣」大使募集

<募集要項>



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

【 平和大使とは 】

「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言により、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

<対象>

市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、裏面の日程にある事前、派遣、事後研修に全て参加できる人を対象とします。

<定員>

22名（応募者多数の場合は、抽選とします。）

引率：松戸市役所 職員3名 ・ 添乗員1名

<費用>

市の負担：長崎への往復航空運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、

8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食。

自己負担：事前、事後研修の会場（市内）までの交通費、8/7の昼食など

<申込方法>

参加申込用紙に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

<提出期限>

平成26年5月23日（金）

<研修日程>

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。(自主学習)

7月 6日(日) 9:00~12:00 結団式及び第1回オリエンテーション
青少年ピースフォーラム等の内容説明。

7月27日(日) 10:00~15:00 第2回オリエンテーション
戦争、原爆、平和等について自主学習します。

8月 2日(土) 10:00~12:00 第3回オリエンテーション
自主学習とスケジュールの確認。

2 派遣研修

(1) 場所 : 長崎市

(2) 期間 : 8月7日(木)~8月10日(日) 3泊4日

(3) 内容 : 青少年ピースフォーラムへの参加等

< 青少年ピースフォーラム >

8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4) 「平和大使長崎派遣」日程表

8/7(木)	松戸駅 → 羽田空港 → 長崎空港 → 長崎市内ホテル (自主学習)	
8/8(金)	午前	平和案内人のガイドによる被爆建造物見学 < 場所: 原爆落下中心地公園、城山小学校など >
	14:00~15:00	開会行事(被爆体験講話など) < 場所: 平和会館ホール >
	15:10~17:00	参加型平和学習(屋内) < 場所: 平和会館ホール >→原爆資料館見学
8/9(土)	午前	平和祈念式典への参列 < 場所: 平和公園 >
	13:30~15:30	参加型平和学習(屋内) < 場所: 平和会館ホール >
8/10(日)	ホテル→ 長崎空港→ 羽田空港→ 市役所帰庁→ 帰庁報告会→市役所解散	

3 事後研修

平和大使長崎派遣報告書(作文)の提出。派遣研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、平和大使長崎派遣報告書を作成します。

また、10月に開催予定の「平和の集い」へ参加します。

～ 平和大使名簿 ～

ぬのかわ 布川	きょう た 恭大	(第一中学校	2 学年)
しらい 白井	ゆうせい 悠生	(第二中学校	2 学年)
まつもと 松本	ゆうき 優樹	(第二中学校	2 学年)
ほんま 本間	ひろあき 宏明	(第三中学校	2 学年)
はたや 旗谷	り さ 吏紗	(第四中学校	3 学年)
みやじま 宮島	か な こ 加奈子	(第五中学校	1 学年)
うえだ 植田	あきと 聖杜	(第六中学校	1 学年)
こうだ 合田	けんたろう 健太郎	(小金中学校	2 学年)
はやさき 早崎	りょう 諒	(常盤平中学校	2 学年)
こいど 小井土	り さ こ 瑠苺子	(栗ヶ沢中学校	1 学年)
もちつき 望月	ゆい 優衣	(六実中学校	3 学年)
かたの 片野	れ な 玲奈	(小金南中学校	1 学年)
わだ 和田	はると 晴人	(古ヶ崎中学校	2 学年)
つしま 對馬	ゆうすけ 悠介	(牧野原中学校	2 学年)
いで 井手	りんたろう 麟太郎	(根木内中学校	2 学年)
ひぐち 樋口	あすか 明日香	(河原塚中学校	1 学年)
さいとう 斎藤	たつひで 龍秀	(新松戸南中学校	1 学年)
くぼた 久保田	みさき 美咲	(和名ヶ谷中学校	2 学年)
きとう 紀藤	な お 菜桜	(旭町中学校	1 学年)

わたなべ りゅう
渡邊 龍 (小金北中学校 1 学年)

のなか りえ
野中 利悦 (聖徳大学附属女子中学校 2 学年)

つきだ まりこ
築田 真理子 (専修大学松戸中学校 3 学年)



～ 平和大使長崎派遣行程 ～

7月6日(日)

◆結団式・第1回オリエンテーション

結団式では各学校から選ばれた平和大使22名に市長から任命証が交付され、それぞれ大使としての抱負を発表しました。

オリエンテーションでは自己紹介をするとともに事業の目的や平和大使の役割などの確認をしました。



〈任命証交付〉



〈平和大使長崎派遣結団式〉



〈オリエンテーション〉

7月27日（日）

◆第2回オリエンテーション

長崎派遣に向けてリーダー・サブリーダーの決定や、持ち物などの必要事項を話し合いコミュニケーションを図りました。また、先輩大使から体験談を話していただき、現地の様子を知ること、平和学習に望む意識を高めました。午後はグループワークで平和について意見交換をし、グループごとに意見を発表しました。



〈リーダーを中心に話し合い〉



〈先輩大使の体験談〉



〈グループワーク〉



〈意見発表〉

8月2日（土）

◆第3回オリエンテーション

長崎派遣5日前のこの日、スケジュールなどの最終確認を行うとともに、原爆資料館へ千羽鶴を献呈するため、折り鶴を作成しました。



〈スケジュール確認〉



〈折り鶴作成〉

8月7日（木）

◆9:20 長崎へ出発

9時00分松戸駅に集合し、出発式を行い、保護者や関係者に見送られて松戸駅を出発しました。12時25分羽田空港発の日本航空1845便に搭乗し、14時22分長崎空港に到着、バスで長崎市内の宿泊ホテルへ向かい、15時30分ホテルに到着しました。



〈松戸駅出発式〉



〈羽田空港出発ロビー〉

◆16:00 自主学習（立山防空壕見学）

ホテル到着後、徒歩で長崎県防空本部があった立山防空壕に行きました。ここは、戦時中県知事などが警備や救護などの指揮を行っていた場所で、原爆投下時はここから国へ被害情報を伝えたそうです。その役割を管理人の方が説明してくださり防空壕内を見学しました。



〈立山防空壕〉

◆18:50 千羽鶴作成（ホテル会議室）

原爆資料館へ献呈するため、大使が作成した折り鶴と市民の方々から頂いた折り鶴で千羽鶴を作りました。千羽鶴に添える標語は、大使が意見を出し合い「明るい世界に はばたく平和 未来に伝える 過去の願い」に決定しました。思いを込めた千羽鶴の完成です。



〈標語作成〉



〈千羽鶴完成〉

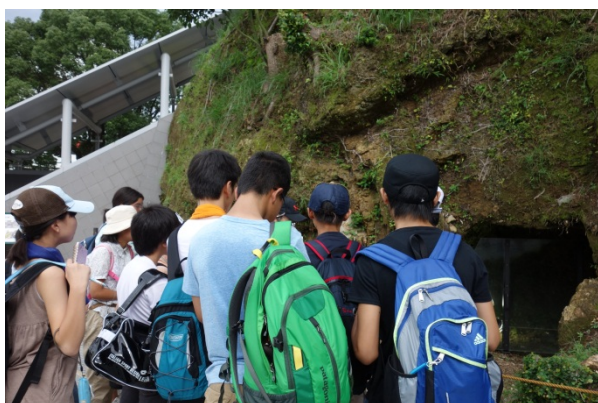
8月8日（金）

◆9:00 自主学習（被爆建造物見学）

朝8時10分にホテルを出発し、路面電車に乗り、被爆建造物見学へ向かいました。

見学は2班体制で、それぞれ平和案内人（ボランティアガイド）のガイドのもと、平和祈念公園、城山小学校、原爆落下中心地などを2時間半かけて歩いて巡りました。平和案内人の方が、当時の悲惨な様子のお話を交えながらわかりやすく説明してくれました。大使たちは貴重な被爆建造物に関心高く見学するとともに平和案内人の説明を熱心に聞き、当時の状況を学びました。

※ 城山小学校内に保存されている被爆旧校舎は、昨年、国の文化財に登録されました。



〈松山町防空壕群〉



〈平和祈念像〉



〈城山小学校の少年平和像〉



〈浦上天主堂遺壁〉



〈原爆落下中心地碑〉

◆13:00 千羽鶴献呈 (原爆資料館)

午後は青少年ピースフォーラムに参加するため、平和会館へ向かいました。その途中で前日大使が完成させた千羽鶴と市民の方々から頂いた千羽鶴を原爆資料館に献呈しました。



〈原爆資料館ロビーにて〉



〈松戸市の千羽鶴〉



〈千羽鶴献呈〉

◆14:00 青少年ピースフォーラム（開会行事）参加

青少年ピースフォーラムには全国から多くの団体が参加しました。開会行事では、青少年ピースボランティアによる開会宣言の後、深堀讓治さんによる被爆体験講話を聞きました。



〈開会宣言〉



〈被爆体験講話〉

◆15:10 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加

続いて、平和学習に移りました。

まずは自己紹介を行った後、青少年ピースボランティアによるスライドや紙芝居による被爆の実相の発表を見ました。その後、レクリエーションで緊張をほぐしてからグループとなり「平和なとき、平和でないとき」を各自短冊に書き出し、意見交換をしました。



〈自己紹介〉



〈スライド〉



〈紙芝居〉



〈グループワーク〉

◆17:00 自主学習（原爆資料館見学）

平和学習終了後、原爆資料館を見学しました。資料館には原爆の実物大模型や原爆の被害を受けた物品などの資料があり、当時の悲惨さを目の当たりにしました。



〈原爆資料館内〉



◆19:00 夕食及びミーティング（ホテル）

ホテルに戻り夕食をとった後、ミーティングをしました。今日学んだことや印象に残ったこと、行動面で明日に向けて改善すべき点、明日の平和祈念式典で学びたいことを一人ずつ発表し、一日を振り返るとともに明日に備えました。



〈夕食〉



〈ミーティング〉

8月9日（土）

◆9:30 平和祈念式典参列（平和公園内）

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列するため、平和公園へ向かいました。大使たちは緊張した面持ちで会場に入りました。

厳粛な空気の中、式典が行われ、午前11時2分、サイレンと長崎の鐘が鳴り響きました。

原爆犠牲者のご冥福と世界の恒久平和を祈り、黙とうを捧げました。

被爆69周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典

式次第

- 10時35分 被爆者合唱
10時40分 開式
原爆死没者名奉安
42分 式辞（長崎市議会議長）
46分 献水
48分 献花
11時02分 黙とう
03分 平和宣言（長崎市長）
13分 平和への誓い
18分 児童合唱
23分 来賓挨拶
38分 合唱 千羽鶴
43分 閉式



〈式典会場〉



〈平和祈念像〉



〈参列の様子〉



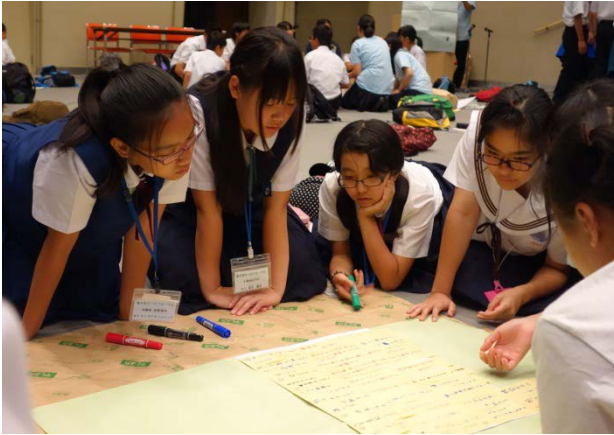
〈黙とう〉

◆13:30 青少年ピースフォーラム（平和学習）参加

午後は前日に続いて、青少年ピースフォーラムの平和学習に参加しました。2日目は、グループで前日の意見交換をもとに平和のためにできることを考え、平和宣言文を作成し発表しました。大使たちはグループの代表として発表するなど、積極的に取り組みました。

平和学習を通じて全国各地からの参加者と交流ができ、貴重な体験となりました。

最後に、青少年ピースフォーラム修了証書をいただきました。



〈意見交換〉



〈発表〉



〈発表〉

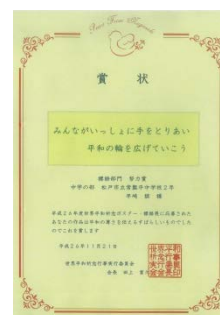


〈代表者へ修了証書授与〉

青少年ピースフォーラムの参加者が提出した「感想シート」の中に、世界平和を祈念する標語を募集する欄がありました。こちらに応募した参加者のうち、嬉しいことに2名の大使が中学の部で努力賞を受賞しました。2名には世界平和祈念実行委員会会長（長崎市長）から賞状が送られました。その大使と標語を紹介します。

常盤平中学校 2年 早崎 諒
「みんながいっしょに手を取りあい
平和の輪を広げていこう」

栗ヶ沢中学校 1年 小井土 瑠芽子
「平和とは 愛と希望と 思いやり」



〈早崎〉



〈小井土〉

◆16:10 自由学習

青少年ピースフォーラムを終え、自由学習に向かいました。大使たちの希望により、出島の中を全員で見学し、長崎の歴史に触れました。

夕食後はグラバー園を散策しました。そこから見た長崎の夜景は美しく、大使たちの良い思い出となりました。



〈出島〉



〈グラバー園〉

8月10日(日)

◆7:20 松戸へ出発

4日間お世話になったホテルの方にあいさつし、バスで長崎空港へ向かいました。10時15分長崎空港発の日本航空1842便に搭乗し、長崎の地を後にしました。飛行機の中では帰庁報告会に向けて準備をしました。

12時00分羽田空港到着。市の迎えのバスで、市役所へ向かいました。



〈長崎空港出発〉

◆13:30 松戸市役所到着

3泊4日の日程で長崎へ行ってきました。
みんな元気で帰ってくることができました。

帰庁報告会が始まる前に、大使一人一人に
ピースフォーラム修了証書が渡されました。

それぞれが修了証書を手にし、これから帰
庁報告会が始まります。



〈修了証書授与〉

～ 平和大使長崎派遣帰庁報告会 ～

◆14:30 帰庁報告会 (7階会議室)

長崎で見て聞いて体験したことを、各々総務部長に報告し、平和への思いを伝えました。



〈帰庁報告〉



〈総務部長の言葉〉



〈平和大使長崎派遣帰庁報告会〉

平和大使の報告



『未来の人たちへ』

第一中学校 2年 布川 恭大

69年前に日本に原子爆弾が投下されました。「戦争を早く終わらせるために落した。」とアメリカは主張していますが、本当のところはどうなのでしょう。自分の考えでは「日本に原子爆弾を落してこの爆弾の威力はどの程度なのかという実験だったのではないか。」と思っています。世界で初の原子爆弾が落された日本。被爆者の数は徐々に減ってきています。そして松戸市の代表として長崎に行ってきた僕ら22名。原子爆弾の悲惨さ、戦争の恐ろしさ、命の尊さなどを学ぶことが僕らの使命でした。そして自分はそれも大事だが、それ以上に大事なことがあるのではないかと考えました。大事なことが分かったのは二日目でした。体験談を聞いていた時に思いました。「このことを皆に話さない。」

自分たちの役目は、事実をありのままに伝えることだと思います。いくら話を聞いても事実を伝えなかったら行った意味がありません。

被爆者たちから話を聞ける最後の世代として、自分ができる精一杯のことをしたいと思っています。自分にしか伝えられないことを周りの人に話していきたいと思っています。

『今、自分たちができること』

第二中学校 2年 白井 悠生

1945年8月9日11時2分。たった一発の原子爆弾によって、長崎の町は一瞬にして死のまちと化しました。当時24万人いた長崎の町は、負傷者7万5千人、死者7万4千人もの被害が出てしまいました。もしそこを無傷で生き残ったとしても、大量の放射線の影響で何年も経ってから突然がんになり亡くなってしまう方も少なくありません。今も一年で3千人以上の方が亡くなっています。やはり、核兵器は絶対にいけないと長崎に行って改めて感じました。

核兵器をなくすために自分たちができることは、二つあると思います。

一つ目は、核兵器の悲惨さを正しく、そしてたくさん知ることだと思います。「自分は長崎の悲劇を繰り返したくない。」「自分の大切なものを失いたくない。」という気持ちがたくさんの人々に芽生えたら、二度と原爆などを使わないはずです。そして伝えることも大切です。たくさんの人に原爆の悲惨さを知ってもらうことが必要です。今は被爆者である「語り部」の方々がいますが、10年、20年たつと語り部の方々は、ほとんどいなくなってしまうと思います。僕たちが当時の人から直接話を聞いて正しく多くのことを後の世代へ伝えて、たくさんの人に知ってもらうことが大切だと思います。

二つ目は、認め合う心を持つことだと思います。認め合うことで、相手のことが分かり、新たな意見が出たり、ゆずり合ったりすることができるようになると思います。そうすれば、相手との意見の食い違いや争いがなくなり、衝突もなくなると思います。長崎の高校生の合言葉に「微力だけど、無力じゃない」という言葉があります。僕もこれからは、微力ですが、核兵器の悲惨さを伝えて相手と認め合って、

平和な未来を創れるように生きていこうと思います。そして原爆のない明るい未来
に向け僕たちの世代が変えていく必要があると、今回の体験で感じることができま
した。

『伝えたいこと』

第二中学校 2年 松本 優樹

1945年8月9日午前11時2分長崎市松山町上空500メートル地点で、一発の原子爆弾により、死者73,884人、負傷者74,199人ももの罪のない人々が大きな被害を受け、身体や心に深い傷を負いました。

私は、長崎に行き、多くのことを学び様々なことを知ることができました。特に原子爆弾による被害はとてつもなく大きかったと言えます。原子爆弾による被害は三つあり、熱線・爆風・放射線がありました。熱線では、人々がどうしようもできないぐらいにボロボロになってしまいました。爆風では、家屋が粉々になったり作業衣に散弾のように無数のガラスや木片が浴びせられました。放射線は、人の身体に入り色々な細胞を壊していき、様々な病気（白内障・白血病・ガンなど）をひきおこして69年経った今でも苦しんでいる被爆者がたくさんいます。

人々だけではなく建物も大きな被害を受けました。爆心地から500メートル離れた所にある城山国民学校は、元々校舎は鉄筋コンクリート三階建てでしたが、原子爆弾により二階三階の一部を除いて大きく破壊されました。

被爆した方の話によると、被爆の直前にB29爆撃機が2機通りすぎたときに空一面がピンク色になり、直後に秒速440メートルの爆風がきたそうです。しばらくたって爆心地の方向を見たら、上の方に真っ赤な雲があり、下の方は真っ黒な雲が広がっていたそうです。爆心地近くに行くと、人々たちがどうしようもないぐらいボロボロになっていて、自分の母親が亡くなっているのを見たとき、「涙がでてこない」と言ったそうです。なんでそういう風に言ったのか、私は一生懸命考えました。被爆者の方は次々とボロボロになって亡くなっていく人たちを見ていたのでも

うどうしようもなかったので、涙が出てこなかったのではないかと思います。

私は平和大使として、2日間行われた青少年ピースフォーラムで平和について同世代の子と話し合いをしました。私は日常で、「平和、平和」と簡単に使っていましたが、ピースフォーラムでの学習で「平和」という言葉に更なる重みを感じることができました。平和というものは身近にあって、なくてはならないものだということがわかりました。一人一人が世界に興味をもつ、知った事を元に自分の意見をもつ、更に、相手を否定する意見を述べるのではなく肯定して自分の意見を相手に分かりやすく伝えることが平和に繋がるということに気付きました。

私は、平和と戦争は紙一重だということを知りました。現在世界には約1万6千発以上の核弾頭が保有されていて、いつ戦争に使われてもおかしくない状況にあります。大多数の核保有国は核兵器廃絶にむけて本格的には動いていません。逆に一部の国では核兵器の開発と実験を繰り返しています。しかし唯一の被爆国であるにもかかわらず、日本政府は積極的に呼びかけをしていないように感じます。原子爆弾の恐ろしさを一番よく知っている日本は、世界のトップに立って動き、アピールすることが必要だと思います。世界で唯一の被爆国であり、被爆地である広島、長崎から、核兵器を廃絶できるように呼びかけていき、これ以上被爆地を増やさないようにしていきたいです。そして、長崎を最後の被爆地とし、これ以上みんなが悲しむことがないように、呼びかけていきたいです。

最後になりますが、私は長崎派遣を通じて多くのことを学ぶことができました。このことを忘れずに、被爆者の次の語り手として家族・友達・先生に伝えていきたいです。そしてこの活動を計画、引率して下さった松戸市役所の皆様、私と一緒に学んだ平和大使のみなさんありがとうございました。今回の経験を一生忘れることはありません。

『僕たちが伝えていく』

第三中学校 2年 本間 宏明

僕は、長崎平和大使としての活動を通して、平和というものへの考え方が以前より深まったと思います。

4日間で特に印象に残っていることは、三つあります。

一つ目は平和祈念式典での平和への誓いです。被爆者代表の城臺さんのお話は、心と力が込もっていて、平和への願いが本当によく伝わってきました。このお話で一番強く感じたことは、「今でもまだ苦しんでいる人がいる。」ということです。何の罪も無い人々を苦しめる核兵器は、非人道的なものであり、もう二度と使われてはならないものです。城臺さんは、一つの爆弾で人間が人間でなくなったとおっしゃっていました。現在の原爆死没者は165,409名です。しかし、原爆で苦しんでいる人は他にもたくさんいます。そして、被爆者の心が癒されることはありません。僕たちは、被爆者の苦しみを絶対に忘れてはならないと思いました。

二つ目は、青少年ピースフォーラムでの意見交換です。全国の人のさまざまな意見を聞くことができました。誰とでも仲良くすることが平和につながる、と言っている人や、感謝の心が平和につながる、と考えている人がいました。意見交換をして、平和に対する考えが深まったと思います。僕は、ピースフォーラムで、「誰とでも仲良くしていく。」と宣言しました。これから、この宣言をしっかりと実行していきます。

三つ目は、青少年ピースフォーラムでの深堀譲治さんのお話です。熱線で焼け死んだ人の話を聞いた時、背筋がぞくぞくとしました。考えただけでも怖いのに、実際に見た深堀さんは、もっと恐ろしい思いをしたのだと思います。深堀さんは、原

爆で母と妹、弟2人を亡くしました。そんな深堀さんにとって、原爆のことは、思い出すだけでもつらいことだと思います。それなのにお話をしてくれたのは、僕たちが語り継いでくれると期待しているからだと思います。その想いを決して無駄にしないようにしたいです。

長崎に原爆が落された後、戦争で、核兵器が使われることはありませんでした。それは、被爆者たちの存在とその声があったからだと思います。今、被爆者健康手帳を所持している人は20万人を下回っているそうです。そして、平均年齢も80歳に達しようとしています。これから、世界に核、戦争の悲惨さを伝えていくのは、僕たちの役目だと思います。平和活動を行う高校生たちの合言葉に「微力だけど無力じゃない。」というものがあります。僕も、今はたいしたことはできないけれど、少しでも被爆者たちの力になり、平和な世界を作るために、核、戦争の悲惨さを多くの人に伝えていきます。社会とは、一人一人の集まりです。僕たちが少しでも変わっていけば、やがて、その輪は大きなものになると思います。多くの人にこの悲惨さを理解してもらえるよう頑張りたいと思います。

このような貴重な体験をさせて頂きありがとうございました。

『平和大使を終えて』

第四中学校 3年 旗谷 吏紗

私たち平和大使は、長崎県で祈念式典に出席し、さらに平和の大切さ、戦争をしない心を学びに行きました。

学んだことのすべてを伝えたいのですが、書き切ることができないので、「今私が一番伝えたいこと」を話したいと思います。

1945年のことです。罪のない人たちが大勢、戦争によって命を落していきました。その中でも一番犠牲者を出してしまったのは、やはり原子爆弾です。

式典の平和への誓いの時に、城臺さんが被爆者代表で、当時のことを、一生懸命話してくださいました。その話の内容は、私の想像を越える残酷なものでした。

城臺さんの友達の子は原爆が投下された時、怪我もしていなかったのに、お母さんになった時、突然亡くなったそうです。

たった一発の爆弾で、人間が人間でなくなり、たとえその時を生き延びたとしても、突然現れる原爆症で多くの被爆者が命を落していきました。

私自身、戦争も原爆も体験していないのでどれくらい大変でどれくらい悲しいとか、聞いて想像し、戦争をしない心を作っていくことしかできません。

ですが、被爆者の方々が何年か経って、いなくなったらどうするのでしょうか。恐らく、戦争を軽く考える若者が増え、あの悲劇が再び繰り返されます。私はそうはなりたくありません。再び、罪のない人たちを大勢亡くさないために、安心してお出掛けのできる平和な環境を作っていくためにも、私はこれから戦争が与えた悲劇などを深く学びたいと思います。そして、将来私は、第二の語り手を作り、やりたいと思っています。語り手を将来本当にできたならばその時は長崎や広島だけでは

なく他の都道府県でもやりたいと思います。

『長崎平和大使として感じたこと』

第五中学校 1年 宮島 加奈子

私が長崎平和大使として派遣され、印象に残ったことは、原爆資料館で見た男子の写真です。その男子は10歳くらいで、小さい弟をおんぶして立っていました。その弟は死んでいてグッタリしていました。どうして死んだ弟をおぶっていたのか。遺体を焼く順番を待っていたのです。私より小さい男子がどうしてこんな悲しい気持ちで辛い思いをしないといけないのか、すべて戦争があったからです。

ピンポン玉ほどのプルトニウムで、こんなに多くの人亡くなって、今でも後遺症で苦しんでいる人がいるなんて、こんなことは今後、絶対にあってはならないと私は思います。

現地で参加したピースフォーラムでは、長崎で語り部として活動されている深堀さんの被爆体験談をお聞きすることが出来ました。聞いていて私はとても悲しく胸が締め付けられる思いでした。この深堀さんのお話をもっと多くの人に聞いてもらいたいと思います。

参列した平和祈念式典では、「献水」が行われました。原爆が落され火傷を負った人たちが「水を水を」と水を求めて、油のような物が一面浮いている川の水を飲んだそうです。その川の水を飲んだ人は死んだり、後遺症に苦しんだりしたそうです。今では安心して自由に飲める水でさえ、原爆の焼野原の中では安全で自分たちを助けてくれるものではなかったなんて、本当に悲惨な状況だったのだと思います。

また、式典には世界各国の代表の方が参列していました。平和を願うのは被爆国の日本だけではなく世界中の人が願っていると思い、私は少し安心しました。

被爆者の方の高齢化が進み、悲惨な被爆体験を語り継ぐ方が少なくなってきてい

ます。次の世代に語り継いで平和な未来を創っていくのは、今回、直接話を聞いた私たち、平和大使の役目だと思います。私は家族、学校、地域の人々に平和の大切さを語り継ぎ、そして今、平和に生活し、勉強できることに感謝して過ごしていきたいです。

今回お世話になった長崎の方々、松戸市役所の方々、平和大使の仲間たち、ありがとうございました。

『長崎で学んだこと』

第六中学校 1年 植田 聖杜

僕は平和の尊さ、原爆の悲惨さを学ぶために長崎へ行きました。

一日目に、立山防空壕を見学しに行きました。立山防空壕では、入口の石にさびた鉄の様な物がありました。ガイドさんに「ここには鉄の扉があったけど爆風でふきとばされたのだ」と言われた時にすごく衝撃を受けました。しかも扉があったにも関わらず防空壕の中も壊れた物があったのですごく驚きました。心の中では、「どんな威力があるのだろう」と思いました。

二日目は、午前中、「平和案内人」の方による被爆建造物等の見学をしました。平和案内人の方は実際に原爆を経験している方なので正確に説明してくださいました。特に心に残る話では、城山小学校のことをよく教えてくださいました。心に残った言葉は、「私たちが最後の被爆者にしてほしい」です。この言葉は強く心に残りました。

午後は、ピースフォーラム一日目でした。ピースフォーラムで深堀さんの話がありました。深堀さんの話では、自分の母親が亡くなったときの感情を明確に伝えてくださいました。深堀さんは、戦争の辛さや原爆の悲しさ等を話してくださいました。僕は深堀さんの話を真剣に聞きました。

その後は平和なこと、平和でないことを話し合いました。その時には戦争のことやイジメや犯罪などが多く出ました。

三日目は、平和祈念式典に出席しました。式典ではすごく多くの人たちが出席していました。今でも原爆に悩んでいる人たちがいると聞いて驚きました。

原爆では1年で約3千人近くが亡くなっているのを聞いて驚きました。そして今

までで165,409人が亡くなっていることを聞きました。原爆が投下された当時の死者数をはるかに越えていることにすごく驚きました。

長崎平和宣言では、長崎市が平和を願っていることを強く思い知らされました。

その後にピースフォーラムをやりました。二日目に話し合っ解決策を考えました。みんな一生懸命に考えていて僕も考えました。

僕はこの派遣で分かったことがあります。

原爆はこの世になくていい存在なのです。現在では世界には1万6千発以上の核兵器が存在しています。原爆はデメリットしかないのです。だから原爆はいりません。

このようなことから自分にできることは、原爆の悲惨さを伝えることが一番だと思います。そのことから、友達や家族などに話していきたいです。

『平和大使長崎派遣報告書』

小金中学校 2年 合田 健太郎

僕は松戸市の平和大使として長崎市に8月7日から8月10日、4日間派遣され学習をしました。長崎で学んできたことを報告します。

・青少年ピースフォーラムへの参加

この活動は、被爆された方が、原爆の影響でどれだけの苦しみや悲しみを感じたか、また戦争は二度としてはならないという強い想いを僕たちに話してくださいました。もう一つ、平和学習会を行い全国の小中学生と一緒に、「平和であると感じた時」と「平和でないと感じた時」をみんなで話し合い、「平和でない時どのようにすれば平和になるだろうか」というテーマで話し合いを進め、僕たちの班が出した答えは、「小さなことでも互いを認め合い、争いのおこらない生活をおくる」ということです。このことを心に刻んで実践していきます。

・平和祈念式典への参列

この行事は毎年8月9日11時2分に被爆した方々に黙祷を捧げます。そのほかにも、被爆者合唱や平和への誓いなど、戦争を繰り返させずに日本の真の平和への訴えを聞き、改めて核兵器の恐ろしさを知りました。

・平和案内人による被爆建造物・原爆資料ガイド

この活動は平和案内人の方が長崎に原爆が落されたことによってどのような傷跡を残したかをガイドしてくださいました。また、平和公園に寄贈された物についての説明や広島より長崎の方が被害は少なかったものの、原爆の威力は長崎の方が大きかったなどの知識も教えてくださいました。最後に平和案内人の方が話してくださいました。「人間は死ぬために生まれてきたが、殺されるために生

まれたわけではない」、「殺人ロボット核兵器をこの世から一刻でも早くなくすことをする努力をしなければならない」と。

そのほかにも出島、グラバー園、立山防空壕などを見学しました。今回の中で一番の目的は平和大使の役割でもある、長崎へ行って学んだこと、感じたことを周囲の皆に話して伝えていくことだと考えます。このことが少しずつでも周りに伝わり、「戦争を二度と起こさない」、「核兵器という恐ろしい物をこれ以上つukらない」、「被爆した人たちの悲しみを知る」、一人一人にこのような意識をしてもらえるように努力していきたいと思います。いつの日か核兵器のない平和な世界が訪れることを願っています。

『平和大使長崎派遣の報告書』

常盤平中学校 2年 早崎 諒

僕は幼稚園の頃から戦争や原爆について、映画や絵本である程度知っていました。だから人の命の尊さ、平和の大切さはわかっていたつもりでしたが、今回長崎に行って被爆者の方の話を聞いたり、資料館や城山小学校を訪ねたりして本当に怖かったし、衝撃を受けたのです。あんな一個の爆弾で家族や友達、家など大切な物が一瞬にしてなくなってしまったのです。自然災害ではなく、人の手によって無差別に全ての物が焼きつくされるなんてどう考えてもおかしいと思います。もし僕が同じ状況で一人だけ残されたことを考えると、とても辛くどうしていいのかわかりません。そして悲しみと憎しみが生まれると思います。

今、地球上には約1万6千発以上の核兵器があります。僕は核兵器を所持している国にそんな物を持っていても何の意味もないし、それを落された所に残るのは悲しみや憎しみしかないということを教えてあげたいです。

原爆資料館で変形した鍋や原爆が投下された11時2分で止まった時計、溶けてくっついてしまったガラスのびんなどを見ました。ガラスが溶けてしまうのですから、とても熱いということがわかります。その熱さを全身で感じるなんて想像するだけでとても怖いのです。

平和祈念式典で、平和を願う被爆者の方が前に立ってお話しされていましたが「もう二度と原爆を落してはならない。戦争をしてはいけない。」という想いがすごく伝わってきました。参列した人々がその気持ちを受け止めて平和への道を歩んでいけたらとてもいいと思います。69年間の平和を願うその想いを受け継ぐのは僕たちです。

僕はこの平和大使長崎派遣を通して、自分の目を見たこと、耳で聴いたことを自分の中にしまい込むのではなく、多くの人に語り伝えていかなければならないと思いました。被爆した方が、悲しい気持ちを抑えて体験したことを僕たちに語ってくれたことは決して忘れません。

伝えること、それが僕の義務だと思います。

『長崎平和大使として学んだこと』

粟ヶ沢中学校 1年 小井土 瑠冴子

私が長崎で学んできたことの中で印象に残っていることについて述べたいと思います。

まず初めは、長崎原爆資料館です。特に浦上天主堂の惨状が心に強く残りました。キリシタン禁制が解禁になったとはいえ、天主堂を建てる技術を持つ人がいない中、信者の方々が30年かけて建築し、原爆投下されるまで20年に渡って守られ続けた浦上天主堂。そしてその信者12,000人のうち70%を超える8,500の方が原爆により亡くなりました。信者の方々が捧げ続けたお金や時間、労力そして信仰心までも無惨に踏みにじられた状況を見て、私は改めて戦争の悲惨さを感じました。

次に私がか心を強く動かされたのが、被爆者の方々のお話です。被爆当時2～4才位の方々は原爆の記憶がないそうですが、たくさん学んでおられて、平和案内人として私たちに熱心に案内してくださいました。私が「目や耳の不自由な方や障がいのある方はどのように避難したり、治療を受けたりしたのですか。」と質問すると、「国や軍は何もしてくれなかった。家族や近所の人たちで障がいのある人たちの家に行き助け出したのだよ。」と話してくれました。また、被爆体験講話をしてくださった深堀讓治さんは、軍国主義教育の中で、名前が外国人風ということで軍事教練の教官になられるなどの暴力にあった、と話してくださいました。また、原爆が投下されたとき、空がピンク色に光ったかと思うとまっ赤な雲ができ、それがまっ黒に変わり、そしてまっ赤な炎になって長崎の街に襲いかかってきた、と当時の状況も話してくださいました。そして、まっ黒に焼けて硬直して亡くなった母親の姿

を見たときには涙すら出なかったこと、原爆からは生き延びたのに、放射能の影響で「兄ちゃん、死ぬなよ。」の言葉を残して亡くなった当時中学1年生の弟さんなど家族の話をする深堀さんは本当に悲しそうでした。

そして最後に心に深く刻み込まれたのは、平和祈念式典での被爆者代表の城臺美彌子さんによる平和への誓いでした。被爆三世であるお孫さんを原爆症で亡くされた話は、私にとってもショックでした。なぜならば戦争は、被爆三世、四世の方々にとって今も続く苦しみだからです。そしてその苦しみを誰よりもよく知る被爆者の方が、総理大臣を目の前にして、憲法を守り、平和を守り続けるよう強く訴えたのです。その勇気ある言動に私は本当に感動しました。

私たちが平和のうちに生き、戦争の加害者にも被害者にもならないためには、平和の尊さと喜びを大人も子どもも皆が知るべきであり、それが平和を作り出す第一歩だと思うのです。そのためにも、平和大使として長崎で学んできたことを私自身のことばでこれからも多くの人に伝えていきたいと思います。

『長崎に行って』

六実中学校 3年 望月 優衣

私は、今回松戸市の平和大使として長崎に行きました。この事業に参加できるのは中学3年生までなので、原爆について知り、いろいろな人と平和などについて話せる良いチャンスだと思い、行くことを決めました。

今回、長崎に行って強く心に残っている事が二つあります。

一つ目は、原爆資料館です。資料館では、原子爆弾が落された11時2分で止まった時計や、焦げたり、溶けたりしている生活用品、被爆した方、亡くなった方が積み重なったりしている写真がありました。なぜ、死んでいる人を撮った写真があるのか、と私は思いました。ですが、このような写真があるから、原爆を実際に体験していない私たちなども「怖い」や「原爆はダメ」と思うのではないかと思いました。

二つ目は青少年ピースフォーラムです。全国から集まった小中学生と平和について意見を出しあってグループで発表したり、被爆者から実際の話を知ったりしました。グループでは、平和な時、平和でない時について意見を出し、これから私たちにできることは何かを話し合いました。私のグループではとても色々な意見が出ました。そして、これから私達にできることは？では「人を差別せずに誰とでも仲良くする」など人に関する意見が多く出ました。私は、意見交換を通して、「人を思いやる心」はとても大きなことなのだと思います。

被爆者の話では、実際に何があったのかを聞くことができました。被爆者の方は、身内のことを話すときに「なさない」と言っていました。私は、なぜなさないのか？と思いました。ですが、話を聞いていてとても色々な事を学ぶことができま

した。実際に話を聞くことができ良かったなと思います。

私は、今回長崎でたくさんのことを学びました。原爆について、平和について、私が想像していたものと大きく違うところもありました。今回の経験を通して平和大使として、たくさんの人に長崎のことを伝えていきたいと思います。

『私が長崎で感じたこと』

小金南中学校 1年 片野 玲奈

私は今回平和大使として長崎に行き、特に印象に残った事が三つあります。

一つ目は、深堀讓治さんのお話です。お話の中に学校での教育のお話がありました。まず、驚いたのは、勉強がしたくても工場で働かされて勉強できないことと、自分の名前で先生に叩かれるということです。まだ子どもなのに働かされて、働かなければ非国民と言われ、そして名前がアメリカ人のようだから怒られると言うのはやはりおかしいと思いました。この時代の子どもは、つらかったと思います。

二つ目は、原爆資料館で見た火傷をした方々の写真です。私はこの写真を見た時に、怖い、恐ろしい、悲しいという気持ちが出てきました。人は大火傷をすると皮膚が垂れ下がって、人の姿ではなくなってしまうと思うと、その写真の前に立ってられなくなりました。どうして、アメリカはこんなに恐ろしいことを二度も起こしてしまったのだらうと思いました。ここで改めて原爆は恐ろしいと思いました。

三つ目は、青少年ピースフォーラムで出た城山小学校の紙芝居です。自分が毎日通っていた学校が一瞬にして、ただのコンクリートのがれきとなってしまっただけでも辛いのに、生き残った先生や生徒の方々はもっと辛い思いをしたと思います。また実際に城山小学校に行き、現在の城山小学校の生徒の方々がこの悲劇を語りつぎ、城山小学校にやってくる人々に伝えているのは、すごいと思いました。私も平和大使として、伝える身になり城山小学校の方々を見習わないといけないと思いました。

私は今回、長崎に行ったことで、様々なことが学べたと思います。戦争は恐ろしい、戦争はしてはいけない。このことを多くの人々に伝えて行こうと思います。も

しも、戦争をしようなんて考える人がいるなら、この原爆のことを教えようと思います。

『平和大使長崎派遣』

古ヶ崎中学校 2年 和田 晴人

僕は長崎に行って平和祈念式典に参加するなどいろいろな経験をしました。その中で印象に残ったことがいくつかあります。

一つ目は、平和祈念式典で城臺美彌子さんが話した「たった一発の爆弾で人間が人間でなくなる」という言葉でした。僕はその言葉を聞いて原爆がどれほど恐ろしいのかを知り、その瞬間胸がドキドキしました。他にも「もう二度と」という歌を聴くと被爆して亡くなった方たちの想いが込もっていてとても感動しました。

二つ目は、原爆資料館です。資料館には原爆がありました。その中にはピンポン玉ほどの大きさのプルトニウムというものがあり、これ一つで長崎の町が破壊されると思うともう戦争は二度と繰り返してはいけないものだとして改めて確信しました。他にも資料館には放射線で髪の毛がなくなってしまった少女や、熱線で溶けてしまったビンなどがあり、原爆の恐ろしさを物語っていました。

三つ目は、ピースフォーラムです。ピースフォーラムでは1グループ15人程度のグループを何個かつくって、普段生活していて平和だなと思うことや平和でないと思ったことを書きました。僕は他の人を見て参考にして書いていたら「何事もなく一日が終わること」と書いている人がおり、確かにその通りだなとあたり前のことに気づきました。しかし平和でないと思ったこともいくつかありましたが「ケンカをしているとき」など戦争に比べたらどうってことないものが挙げられていたので、今の時代は平和だなと思いました。

四つ目は、平和祈念像の大きさです。僕は初めて長崎に行ったので平和祈念像

の大きさを知らず想像で自分の5倍ほどの大きさだと思っていましたが本物は想像を超えるほど大きかったのでとても驚きました。

僕は今まで長崎のことを全く知らず、関心も無かったのですが、今回長崎に行って原爆のことや歴史について詳しく知りいろいろなことを学ぶことができました。僕はその学んだことをできるだけ多くの人に伝えていきたいです。

『命や身近な物の大切さ』

牧野原中学校 2年 對馬 悠介

平和大使としてとても思い出深い四日間が終わりました。僕は、長崎の街はとてもきれいだったこと、教科書やドラマで戦争の悲惨さや被爆後の人や町の様子についてたくさん学んだはずだったのに、それは思っていた以上に残酷で恐ろしいということを知り初めて旅になりました。

ピースフォーラムで一番印象に残ったことは、被爆体験講話です。その講話では、人が人ではなく、脳みそが飛び出ている人や、肌が溶け骨がまる見えになっている人のことなど被爆者の方の言葉の一つ一つが重く、聞いていて耐えられませんでした。その中でも一番心が動かされた言葉があります。「私はお母さんの遺体を見た時は涙も言葉も出なかった…」このようなことが人生にあっても良いのでしょうか。たった一つの原子爆弾が多くの方々の命を奪いたくさんの心を傷つけ、未だに広範囲にまき散らされた放射線で苦しむ人が存在することは事実です。僕たちは決してこの事実から逃げてはいけません。その事実を知ったからには命ある限り後世に伝えていかなければならないと思うのです。

平和祈念式典では被爆者の方が歌っていた「もう二度と」と言う歌の歌詞に感動しました。「もう二度と作らないで私たち被爆者をこの広い世界の人々の中に」。この歌詞は、帰って来た今でも耳から離れません。

この派遣で僕は幸せ者だと強く感じました。両親がいること、毎日おいしいご飯を食べられること、毎日学校へ行けること、温かいお風呂に入れること、それら全てがあたりまえだと思っていた自分がこの派遣で大きく変わったのです。テスト勉強をやりたくない、部活動が苦しいなどと思っていた自分が恥ずかしくなりました。

今後に辛いことがあったら学んだことを思い出し自分に負けずに頑張ります。

『過去と向き合う』

根木内中学校 2年 井手 麟太郎

今回、長崎平和大使派遣に応募しようと考えたのは、僕の80才になる祖父の言葉がきっかけとなっています。祖父は、時折「戦争は大変だったのだぞ…」と話すことがあります。しかし、多くは語ってくれません。祖父は小学五年生の時に空襲から逃れる為に東京から学童疎開をしたそうです。戦争中何が起こっていたのか？どのような悲惨で大変な出来事があったのか？戦争とは…？平和とは…？ということに関心が深まり、原爆を投下された地に行きたくさんのことを学びたいと考えたからです。

8月7日から8月10日の4日間とオリエンテーション3日間の計7日間という短い間でしたがたくさんのことを学びました。

まず現地に入り長崎の原爆は広島の前爆より威力が強かったということを知りました。ピンポン玉ほどのプルトニウムの原爆が投下された街は一瞬にして全く違う物となってしまったそうです。何もかもを奪う悪魔の兵器でした。

そして原爆資料館では、目をそむけたくなるような展示品が多くありました。例えば熱によって皮膚がただれながらも歩きまわる人々の姿。黒こげになった多くの死体など残酷な写真が何枚もありました。今現在、自分の暮らしがどれほど平和なのか、当たり前にならぬ自由なく生きていられることがどれほどありがたいことなのかと改めて考える時間になりました。

次に、僕たちをガイドしてくれた被爆経験者の平和案内人さんの話で印象に残っている言葉があります。それは「人は死ぬために生まれてきたが、殺されるために生まれてきたわけではない」という言葉です。この言葉には、人はいつかは

死んでしまうが、誰かの手によって尊い命を絶たれるということは絶対にあってはならないということです。そして僕はこの言葉を聞いた時、人は死ぬために生まれてきたわけではなく、生きるために生まれてきたのではないかと思いました。だからこの命が続く限り精一杯生きようと思います。自分の命も、人の命も大切にしようと思えました。

今現在、世界中には1万6千発以上の核兵器があり、世界各地で紛争が起きています。原爆がいつ落されてもおかしくない状況です。原爆と紛争が1分でも1秒でも早くなくなるべきだと思います。

日本は原爆を落とされました。しかし日本人も戦争をしてたくさん尊い命を奪ってきました。その過去としっかり向き合えば本当の平和がおとずれると思います。そして僕も自分自身と向き合い平和な未来を築いていこうと思います。

最後にこの平和大使長崎派遣で僕を成長させてくれた方々、本当にありがとうございました。

『長崎平和大使に参加して』

河原塚中学校 1年 樋口 明日香

私は4日間で、たくさんのことを学ぶことができるとても良かったと思いました。

この松戸市の事業で、調べてもわからなかった話や写真、展示物などが実際に勉強できたからです。それを特に学ぶことができたのは、原爆資料館です。資料館では、原爆を経験した人のビデオや、どろどろに溶けて固まったビンの塊など原爆がもたらした苦しみをととても感じたからです。私がとても恐ろしいと思ったのが、ケロイドなどの被爆したあとの後遺症です。被爆して食料などが無い中、生き延びたのに、ケロイドでやけどの跡が残ったり、白血病で発熱して長い間苦しんだりすることがあるからです。

戦争や爆弾でたくさんの方が亡くなってもなお自分の国を守るためや、武力があると示すために爆弾や原爆を所有しているのは戦争に繋がる原点になるので、戦争をしないための署名活動や世界へ訴えていくことが必要だと思いました。

また、被爆体験講話では、深堀譲治さんが爆風の威力や熱線の力のことなど、たくさんのお話を話してくださいました。深堀さん以外の家族のみんなは、爆心地から約600メートルの所で被爆して亡くなりました。心に深く傷を負ってもこの話をしてくださり、被爆体験講話は、戦争とは何か？平和とはどのようなことなのか？と、ふだん普通に口にする言葉の意味を考えさせてくれました。

二日目は平和祈念式典に参列して、平和への誓いを聞いたり、被爆者の方たちが伝えたいことについて話をしました。今、被爆者健康手帳を持っている方は、全国で20万人以下で80歳に達しようとしているので、これから私たちが伝えていかなければいけないと思いました。語り部の方々はわかりやすく話してくださいまし

た。これから世界で戦争や紛争が起き、大きな犠牲がでるかもしれないという事実
に向き合っていきたいです。

『永遠の11時2分』

新松戸南中学校 1年 斎藤 龍秀

僕はこの派遣研修で、平和大使の目的である「原爆投下の地である長崎市訪問」を通して、被爆の実相と平和の尊さを学ぶことが出来たと思います。

僕は派遣研修を終えて、「平和大使」として長崎に派遣されていなかったら、今回学習してきた一つである、原爆が落された時などの実態さえも、あやふやなままこの夏を過ごしていたのではないか、と思っています。

そして僕はこの学習で、被爆された方の体験談を聞きました。すると、今まで実際の出来事として感じられなかった話を生で聴いたとき「これがもし、自分の身にふりかかったら…」と初めて考えることができ、恐ろしく、そして想像を絶していると思い、同時に「死」ということに敏感になりました。

しかし、死に敏感になったのは、意味のあることだと思います。なぜなら僕は、原爆を行使したりしている戦争に恐怖をもったということ、その恐怖があれば、二度と原爆を使わないようにしようと思うことができ、平和につながると思うからです。

僕は、平和大使として、この経験を人々に伝えていく必要があると思いました。そして、僕たちには、きちんと伝える責任があると思います。それは、日本が世界で唯一の被爆国であり、僕たちが被爆された方の話を聴ける最後の世代だからです。今年には原爆投下から69年になり、今、被爆者健康手帳を持っている方は全国で、20万人以下であり、平均年齢は80才に達しようとしている状況だそうです。

僕たちは、二日間の青少年ピースフォーラムで他の都道府県の方々と学習して、それぞれ考え方が違うことを学び、話し合っ、皆で平和宣言文をまとめて班ごと

に発表しました。この平和学習を活かし、被爆や原爆のことを伝えていこうと思い、そのことに使命感を持ちました。

長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参列し、長崎市長の平和宣言を聞いたり、被爆された方の想いを聞いたり、貴重な体験をすることもできました。

今の気持ちを忘れずに、戦争の無意味さや原爆の悲惨さ、平和の尊さについて、これから伝えていきたいと思います。

『平和だということ』

和名ヶ谷中学校 2年 久保田 美咲

「原爆を落して正解だった。」

これは、外国の方が長崎原爆資料館の中にある映像で言っていた言葉です。私は、この言葉を聴いて、とても驚きました。長崎市の人口約24万人中7万人以上の方が、爆風や熱線、放射能で亡くなり、今も毎年3千人前後が原爆の影響で亡くなっているということを知ったばかりだった私は、本当にそうだろうかと思いました。その人は、「原爆を落したことで、日本は降伏した。原爆によってたくさんの方が亡くなったが、原爆によってたくさんの方の命が救われた。」とも言っていました。それを聴いて、考え方が違う人もいるのだなと思う一方で、原爆を落して正解だとは、とても思えませんでした。原爆は、たった一つ落しただけで、たくさんの方が辛い思いをしています。だから、どんな理由があっても、原爆を使うのは間違っていたと思います。

私は、今回の派遣を通して、改めて、「平和」というものを考えました。そこで思ったのは、何事もない、友達と話したり、学校に行って授業を受けたり、おいしいものをたくさん食べられるという生活が平和なのだと思います。

その平和を守るためには、自分とは違う人も受け入れられるような広い心をもつことが大切だと思います。そのためにも、私は今回経験したことを周りに伝えていきたいと思っています。

『平和への架け橋』

旭町中学校 1年 紀藤 菜桜

「ピカッ」これは一瞬の出来事でした。1発の爆弾に、たくさんの人の命が奪われました。長崎に行って、実際に原爆を経験した人の話を聞くまで、自分にはあまり関係のない遠い昔の出来事だと感じていました。

長崎に行ってピースフォーラムに参加しました。そこで聞いた被爆者の方の辛くて悲しい話は、私は一生忘れることはできないでしょう。そのうちの一人、深堀さんは原爆でお母さんを亡くしていました。原爆が投下された後、深堀さんがお母さんを初めて見たとき「涙も出なかった」と言っていました。私はその言葉を聞いて、どれだけ悲惨だったのかということがわかり、とても驚きました。自分のお母さんが死んでしまっても涙が出ないくらいショック…。私は言葉を失いました。私のお母さんが深堀さんのお母さんみたいな状態になったら涙が出てしまうけど、深堀さんの涙が出なかったという心情を知ろうとしても、私にはできませんでした。

その他にも、原爆資料館や平和祈念式典にも参加することができました。特に、原爆資料館の11時2分で止まった時計が印象に残りました。私はこの時計を見て、核兵器のおそろしさがすごくわかりました。

核兵器を「持たない、作らない、持ちこませない」という非核三原則があるからこそ、そして被爆国の日本だからこそ、世界に向けて核兵器をなくそうとしていかなければなりません。

今年で戦後69年、戦争を経験した方がどんどん高齢になっていきます。私たちのような若い世代が昔の事実を知り、このような悲惨なことがないようにこれから語り続けなければならないと思いました。

私は何をしていけば良いのか。今回の体験を身近な人に伝えていくことから始めよう。私一人の力が小さくても、いつか大きな輪になることを信じよう。「ピカッ」を希望の光に変えて行こう。

『平和大使になって知ったこととやること』

小金北中学校 1年 渡邊 龍

ぼくが一番心に残ったのは原爆の被害、被爆者の症状です。爆風、熱線、放射線です。爆風ではガラスが刺さったり熱線では皮膚が溶けたり、放射線では髪の毛が抜けてしまったりしてどれも自分になってしまったら正常に生きていけません。しかも原爆が落ちた所にはものすごい熱が発生します。その熱で体中の水分は蒸発してしまい人々は皮膚をたらして「水～水～」と言いながら手を前に出しながら水を求めていたそうです。ものすごくかわいそうでした。水があってもきのこ雲の後に急発達した黒い雲から降ってきた黒い雨のせいで汚れていたりして飲めなかったそうです。その時の精神状態だったらぼくも「水～水～」と言いながら水のことしか考えられなかったと思います。

次に心に残ったのは平和式典です。被爆者の核兵器への想い、原発再稼働に対する想いなどの怒りなどがものすごく伝わってきました。それと真ん中にある平和祈念像にはちゃんと意味があり、上を指しているのは原爆の恐怖、平行の手は平和、クロスさせている足はお坊さんのめいそう、平和祈念像が男性なのは、原爆の強さを表している、そして平和祈念像が見ているところは原爆落下中心地、この像一つでたくさんの意味がこめられていることを知って、原爆の恐ろしさを再度知ることが出来ました。

最後に、ぼくが心に残ったことは城山小学校の像です。母や父が死んでしまい一人になってズボンしか残っていなかったのに僕に見えた姿はとてもたくましかったです。

それらのことを知りぼくは原爆のことを広く多くの人に伝えなければならない

と強く思いました。なぜなら原爆投下や戦争は二度と起こしてはならないし、被爆者の方々が辛い思いをして教えてくださったので伝えていかなければいけないと思ったからです。

『私が伝えていくもの』

聖徳大学附属女子中学校 2年 野中 利悦

私は、長崎に着いて「ゾッ」としました。こんなに綺麗な長崎の街を一瞬にして焼け野原にかえてしまう原子爆弾の怖さを感じました。

初日は「立山防空壕」へ行きました。ここは爆心地から約2・7キロメートルも離れているのに出入り口付近は壊れかけていて爆風の強さを感じました。

二日目は、現地のガイドさんに案内をしていただきました。また案内して下さる方が実際に被爆者で当時のことをとてもわかりやすく教えてくださいました。教えていただいた中で一番驚いたのは、爆心地があるのは長崎だけということです。それと高台にある城山小学校に居た人のほとんどが亡くなってしまったことです。これには私は、そんなに爆風ってすごい、と疑問を持ちました。家に帰って数日たった日のテレビで戦争のことについてやっていました。すると、原子爆弾は作る時に一番重要視されていたのが、爆風でどれだけの人を殺せるかということだったらしいです。あの時、城山小学校には何トンという重さがかけていたらしいです。これには驚きました。

三日目は平和祈念式典に出席させてもらいました。被爆者代表の方のお話で

「武力で平和なんて築けるのですか。」という言葉に、あっと思いました。それだけ戦争は恐ろしいものです。

私は帰ってきて、学校に行き、クラスの友達に戦争のことをどう思っているかを聞くと、ただ怖そうや今の日本は強いからやっても勝てるという意見ばかりがでて、とても恐ろしかったです。今回現地へ行かせていただいたから私は本当の怖さを知ることができたし、身近な人に伝えることもできるようになりました。これからも

身近な人に伝え、少しでも平和になるために役立てられればいいなと思います。

『長崎平和大使報告書』

専修大学松戸中学校 3年 築田 真理子

長崎平和大使として初めて長崎へ行き、原爆とはどんな物だったのか、平和とは何なのかを学びました。その中で印象に残った事が二つあります。

一つ目は、原爆の威力です。ピンポン玉一つ分のプルトニウムだけで長崎市を爆風、熱線、放射能で焼きつくし瞬時に7万人以上もの命を奪い、同時に7万人以上の人を負傷させました。また、かろうじて生き延びた人を今もまだ、原爆後症傷で苦しめ、その子孫にまでも被害を与えています。それでも、実際に爆弾の中にあったプルトニウムは20%しか炸裂しなかったのです。一体、アメリカは何万人を殺し、いくつの町を焼きつくし、何万人をこの先も苦しめるつもりだったのでしょうか。

二つ目は、被爆者の方々のお話です。平和祈念式典では被爆者合唱団ひまわりや被爆者代表の城臺さんが

「もう二度と被爆者をつくらないで。」

と力強く言い、心の底から強く平和を願う姿を見て心を打たれました。また、第二人と妹一人、お母さんを亡くした深堀さんは、8月10日、爆風であとかたもなくなった自宅で

「母を見つけました。黒く焼け焦げて死んでいる母を見ても、涙がでませんでした。ただただ立ちつくしていました。」

と語って下さいました。原爆は尊い命や家族を奪うだけでなく涙や笑顔などの感情も深堀さんから奪ったのです。被爆者の方々は残りの命をサバイバーとして語り継ぐとおっしゃいました。私たち中学生は、学校の教科書で勉強するだけでなく被爆

者や戦争を体験した方の話を聞くべきです。

一言で、「世界平和」や「戦争をなくす」と言うことは簡単です。けれど、多くの人が口だけではありませんか？ 戦争の実態を知らず、原爆の威力も知らず、平和の為にどうしたらいいかを考えずにただ言っている。私はそんな気がします。皆が笑っている時や、嫌なことがあっても協力し、支えあっている時が、私の考える「平和な時」です。逆に「平和でない時」は辛い思いをしている人がいる時です。「微力だけど無力じゃない」今の私に出来ることを考え、平和のために笑顔で思いやりのある生活をし、平和についてもっと周りの人たちに伝えていきたいです。

長崎平和宣言

69年前のこの時刻、この丘から見上げる空は真っ黒な原子雲で覆われていました。米軍機から投下された一発の原子爆弾により、家々は吹き飛び、炎に包まれ、黒焦げの死体が散乱する中を多くの市民が逃げまどいました。凄まじい熱線と爆風と放射線は、7万4千人もの尊い命を奪い、7万5千人の負傷者を出し、かろうじて生き残った人々の心と体に、69年たった今も癒えることのない深い傷を刻みこみました。

今も世界には1万6千発以上の核弾頭が存在します。核兵器の恐ろしさを身をもって知る被爆者は、核兵器は二度と使われてはならない、と必死で警鐘を鳴らし続けてきました。広島、長崎の原爆以降、戦争で核兵器が使われなかったのは、被爆者の存在とその声があったからです。

もし今、核兵器が戦争で使われたら、世界はどうなるのでしょうか。

今年2月メキシコで開かれた「核兵器の非人道性に関する国際会議」では、146か国の代表が、人体や経済、環境、気候変動など、さまざまな視点から、核兵器がいかに非人道的な兵器であるかを明らかにしました。その中で、もし核戦争になれば、傷ついた人々を助けることもできず、「核の冬」の到来で食糧がなくなり、世界の20億人以上が飢餓状態に陥るという恐るべき予測が発表されました。

核兵器の恐怖は決して過去の広島、長崎だけのものではありません。まさに世界がかかえる“今と未来の問題”なのです。

こうした核兵器の非人道性に着目する国々の間で、核兵器禁止条約などの検討に向けた動きが始まっています。

しかし一方で、核兵器保有国とその傘の下にいる国々は、核兵器によって国の安全を守ろうとする考えを依然として手放そうとせず、核兵器の禁止を先送りしようとしています。

この対立を越えることができなければ、来年開かれる5年に一度の核不拡散条約（NPT）再検討会議は、なんの前進もないまま終わるかもしれません。

核兵器保有国とその傘の下にいる国々に呼びかけます。

「核兵器のない世界」の実現のために、いつまでに、何をするのかについて、核兵器の法的禁止を求めている国々と協議ができる場をまず作り、対立を越える第一歩を踏み出してください。日本政府は、核兵器の非人道性を一番理解している国として、その先頭に立ってください。

核戦争から未来を守る地域的な方法として「非核兵器地帯」があります。現在、地球の陸地の半分以上が既に非核兵器地帯に属しています。日本政府には、韓国、北朝鮮、日本が属する北東アジア地域を核兵器から守る方法の一つとして、非核三原則の法制化とともに、「北東アジア非核兵器地帯構想」の検討を始めるよう提言します。この構想には、わが国の500人以上の自治体の首長が賛同しており、これからも賛同の輪を広げていきます。

いまわが国では、集団的自衛権の議論を機に、「平和国家」としての安全保障のあり方についてさまざまな意見が交わされています。

長崎は「ノーモア・ナガサキ」とともに、「ノーモア・ウォー」と叫び続けてきました。日本国憲法に込められた「戦争をしない」という誓いは、被爆国日本の原点であるとともに、被爆地長崎の原点でもあります。

被爆者たちが自らの体験を語ることで伝え続けてきた、その平和の原点がいま揺らいでいるのではないか、という不安と懸念が、急ぐ議論の中で生まれています。日本政府にはこの不安と懸念の声に、真摯に向き合い、耳を傾けることを強く求めます。

長崎では、若い世代が、核兵器について自分たちで考え、議論し、新しい活動を始めています。大学生たちは海外にネットワークを広げ始めました。高校生たちが国連に届けた核兵器廃絶を求める署名の数は、すでに100万人を超えました。

その高校生たちの合言葉「ビリョクだけどもリョクじゃない」は、一人ひとりの人々の集まりである市民社会こそがもっとも大きな力の源泉だ、ということ私たちに思い起こさせてくれます。長崎はこれからも市民社会の一員として、仲間を増やし、NGOと連携し、目標を同じくする国々や国連と力を合わせて、核兵器のない世界の実現に向けて行動し続けます。世界の皆さん、次の世代に「核兵器のない世界」を引き継ぎましょう。

東京電力福島第一原子力発電所の事故から、3年がたちました。今も多くの方々不安な暮らしを強いられています。長崎は今後とも福島の日も早い復興を願い、さまざまな支援を続けていきます。

来年は被爆からちょうど70年になります。

被爆者はますます高齢化しており、原爆症の認定制度の改善など実態に応じた援護の充実を望みます。

被爆70年までの一年が、平和への思いを共有する世界の人たちとともに目指してきた「核兵器のない世界」の実現に向けて大きく前進する一年になることを願い、原子爆弾により亡くなられた方々に心から哀悼の意を捧げ、広島市とともに核兵器廃絶と恒久平和の実現に努力することをここに宣言します。

2014（平成26年）8月9日

長崎市長 田上 富久

以下、長崎平和宣言（ことばの解説）から抜粋

◆世界に1万6千発以上の核弾頭

長崎に落とされた原爆は、通常火薬の約2万1,000トンの量に相当する威力があったといわれています。

一方で現代の核兵器は、その数倍から数百倍の威力を持つものまであります。

核保有国が持っている核弾頭は、使用できる状態にあるもののほか、ミサイルから取り外されているものの、再び使用できるよう保管されているものも含めると、アメリカ7,300発、ロシア8,000発、イギリス225発、フランス300発、中国250発となっており、インド、パキスタン、イスラエル、北朝鮮などの推計もあわせると、世界中に1万6千発以上の核弾頭があるといわれています。

◆核兵器の非人道性に関する国際会議

この会議は、核兵器の使用が短期及び長期においてもたらす影響について各国の専門家が科学的な視点から議論を行うものです。

第1回はノルウェーのオスロで2013年（平成25年）3月に開催され、127の国及び関係機関から約550名が参加し、多くの命を一瞬で奪い去る核兵器の短期的な影響について議論が行われました。

第2回はメキシコのナジャリットで2014年（平成26年）2月に開催され、146の国及び関係機関から参加があり、被爆者に苦しみを与え続ける核兵器の長期的な影響について議論が行われました。

2014年（平成26年）12月には3回目の会議がオーストリアのウィーンで開催される予定です。

◆核の冬

アメリカとソビエトが対立していた東西冷戦のさなか、1983年（昭和58年）に宇宙物理学者のカール・セーガン博士をはじめとする研究者たちが、核戦争後に到来する「核の冬」を予測しました。

「核の冬」とは、多くの核兵器の爆発や火災などで、巻きあげられた煙や粉塵等により、太陽光が遮断され、気温が急激に低下する現象のことを指し、食糧生産が大きく減少し、地球規模で飢餓状態に陥る危険があります。「核の冬」が人類存続を脅かす可能性を示したことは、核軍拡競争を終わらせるひとつの要因となったとも言われています。

最近では、気象学者のアラン・ロボック博士らが最新のコンピューターを使って、地域を限定した小規模の核戦争であっても、気候変動は地球規模で起こり、人類全体に深刻な影響を与えるという予測をあきらかにしました。

また、「核の冬」は当初、考えられていたよりもずっと長く 10 年以上は続くと考えられており、人類にとって取り返しのつかない事態になることが想像されます。

「核の冬」をさらに詳しく調べることで、核戦争が人類に深刻な影響を与えることがわかり、国際社会において、「核兵器のない世界」を求める声はさらに高まっていくと考えられています。

◆核兵器禁止条約

核兵器の開発、実験、製造、配備、使用をすべて禁止して、また、現在、保有している核兵器を解体して使えなくする条約です。

核兵器禁止条約は、国際司法裁判所が 1996 年（平成 8 年）に「核兵器の使用・威嚇は一般的に国際法に違反する」とした勧告的意見が始まりとなりました。

1997 年（平成 9 年）に国際反核法律家協会など 3 団体が、「核兵器は違法」とする考えに基づいて、モデル核兵器禁止条約の案を発表し、同じ年にコスタリカ政府が国連に提出しました。

2007 年（平成 19 年）には、コスタリカとマレーシア両政府が、核不拡散条約（NPT）再検討会議準備委員会、国連総会に改訂版の条約案を提出、2008 年（平成 20 年）には潘基文（パン・ギムン）国連事務総長も、核軍縮に関する 5 項目の提言を発表して、禁止条約を検討するよう加盟各国に求めています。

◆核不拡散条約（NPT）再検討会議

(1) 核不拡散条約

核不拡散条約（NPT）は、核兵器保有国が増える（核が拡散する）ことを防ぐ目的でつくられた条約で、1970 年（昭和 45 年）に発効しました。2003 年（平成 15 年）1 月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中で、インド、パキスタン、イスラエルの 3 か国を除く 190 か国が加盟しています。

主な内容は、1967 年（昭和 42 年）1 月時点で核兵器を保有していたアメリカ・ロシア・イギリス・フランス・中国の 5 か国だけに核兵器の保有を認め（核保有国）、それ以外の国（非核保有国）が保有することを禁止しています。

核保有国には、核兵器を減らすための交渉を誠実にを行うことを求め、非核保有国には核兵器の製造、取得を禁じています。

また、非核保有国には、原子力の平和利用が認められており、原子力発電

所を建設する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関（IAEA）の検査を受ける義務があります。

しかし、イランは、原子力の平和利用を名目に核兵器を開発しているのではないかと疑いを持たれているほか、核保有国の核兵器の削減も進んでいないなど、多くの問題を抱えています。

核兵器の保有国を増やさないためにも、この条約内容に各国が真剣に取り組むことに加え、核兵器禁止条約など新たな取組みも求められています。

（2）再検討会議

核不拡散条約（NPT）では、核兵器の軍縮や拡散の状況を定期的に検討するため、5年毎に再検討会議と、その間に3回から4回の準備委員会が開催されます。

2000年（平成12年）の再検討会議では、核保有国による核軍縮への努力が不足しているとの声が高まり、「核兵器の全面廃絶に対する核兵器保有国の明確な約束」を盛り込んだ合意文書が採択されました。

しかし、2005年（平成17年）の再検討会議は、核保有国と非核保有国の意見が鋭く対立し、成果を得ることなく閉幕しました。

2010年（平成22年）の再検討会議は前年にアメリカのオバマ大統領が登場し、「核兵器のない世界」への機運が高まる中で開催され、「核兵器のいかなる使用も人道上、破滅的な結果をもたらすことを深く憂慮する」と核兵器の非人道性が明記された核軍縮に向けた64項目の行動計画を柱とする最終文書が採択されました。

次回の再検討会議は、2015年（平成27年）4月27日から5月22日までニューヨークの国連本部での開催が決定しています。

◆非核兵器地帯

非核兵器地帯とは、ある区域内の国々が、条約を結び、核兵器の製造、実験、取得、保有などをしないと約束するものです。この条約によって核戦争の危機をなくし、国際的な緊張をやわらげることにもつながります。

地球の南半球は、1967年（昭和42年）のラテン・アメリカ核兵器禁止条約のほか4つの条約（南極条約、南太平洋非核地帯条約、アフリカ非核兵器地帯条約、東南アジア非核兵器禁止条約）によって、すでに陸地のほとんどが非核化されています。北半球でも、1998年（平成10年）にモンゴルの「非核地位」が国連で認められ、2009年（平成21年）には中央アジア（ウズベキスタン、タジキスタン、キルギス、トルクメニスタン、カザフスタン）非核兵器地帯条約が発効されています。

◆非核三原則

非核三原則とは、核兵器を「持たない」「つぐらない」「持ち込ませない」という被爆国である日本政府の3つの原則のことです。

1967年(昭和42年)12月、当時の佐藤栄作首相が国会(衆議院の予算委員会)で表明しました。1971年(昭和46年)11月の衆議院で沖縄返還に関連して、初めて国の方針(国是)として決議(国会の意志を決めること)が行われました。

◆北東アジア非核兵器地帯構想

北東アジア非核兵器地帯とは、日本と韓国と北朝鮮の3か国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約として成立するためには、3か国に核兵器が存在せず、近隣の核保有国(アメリカ、ロシア、中国)が、3か国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります(北東アジア非核兵器地帯構想)。

日本では、1971年(昭和46年)に非核三原則の国会決議が行なわれ、また、韓国と北朝鮮による「朝鮮半島非核化共同宣言」が、1992年(平成4年)に発効するなど、それぞれの国が非核化を表明しました。

しかし、2006年(平成18年)10月、北朝鮮が最初の核実験を実施し、さらに、2009年(平成21年)5月に2回目を、2013年(平成25年)2月に3回目の核実験を強行したことから、朝鮮半島の非核化の実現が困難な状況になりました。

今後、北東アジア非核兵器地帯を実現するためには、国際社会が結束して、北朝鮮の核を放棄させることが必要となります。

◆ビリョクだけどもリョクじゃない

この言葉は高校生平和大使が平和活動を行う上での合言葉となっています。高校生平和大使は1998年(平成10年)5月のインド及びパキスタンによる核実験を契機に長崎の声を国連に届けるために派遣されました。

1998年以降、毎年国連に派遣されており、2001年(平成13年)からは高校生が集めた核兵器廃絶を求める署名を提出しています。

◆ N G O

N G O（非政府組織）とは、政府ではない一般の人たちが活動するグループで、政治や党派、あるいは利益を得ることを目的としない国際的な問題に取り組む団体をいいます。

世界では、貧困、人権、環境といった問題の他に、平和問題などの分野においてN G Oが活躍しており、長崎では、2000年（平成12年）以降、3～4年に1回、国内外のN G Oの参加を得て、核兵器のない平和な21世紀の実現を目指した「核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」を開催しています。

2013年（平成25年）11月には、5回目の集会が開催され、核兵器廃絶に向けた具体的な行動と唯一の被爆国である日本の責務を訴える「長崎アピール2013」を被爆地長崎の声として採択しました。

核兵器廃絶に向け、国際的なN G Oの取組みが活発となる中、長崎市としても、N G Oとの連携による取組みの重要性を認識しています。



～ 歴代平和大使名簿 ～

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十年度(二〇〇八年)	1	熊川 実旺 (第四中 2年)
	2	別宮 賢治 (第五中 2年)
	3	渡邊 ちさと (六実中 3年)
	4	片野 結依 (小金南中 1年)
	5	清水 のどか (古ヶ崎中 1年)
	6	藤井 彩乃 (新松戸南中 2年)
	7	清水 健人 (金ヶ作中 1年)
	8	神部 莉奈 (新松戸北中 2年)
	9	山本 拓実 (旭町中 3年)
	10	黒木 若葉 (聖徳大学附属中 1年)
平成二十一年度(二〇〇九年)	1	川本 景介 (第一中 1年)
	2	鈴木 亜加里 (第二中 1年)
	3	小幡 祐太 (第三中 1年)
	4	山田 政明 (第四中 1年)
	5	清水 彬奈 (第五中 1年)
	6	久佐野 美奈子 (第六中 1年)
	7	増野 友梨奈 (小金中 2年)
	8	井山 陽菜 (常盤平中 2年)
	9	小林 美幸 (栗ヶ沢中 1年)
	10	熊川 大揮 (六実中 1年)
	11	高島 里夏 (牧野原中 3年)
	12	西 志穂 (河原塚中 3年)
	13	工藤 颯人 (根木内中 1年)
	14	四家 明宜 (金ヶ作中 1年)
	15	児島 一華 (和名ヶ谷中 1年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十二年度(二〇一〇年)	1	櫻井 和奏 (第一中 2年)
	2	吉田 彩乃 (第二中 1年)
	3	三橋 若奈 (第三中 1年)
	4	笹本 幸輝 (第四中 2年)
	5	比嘉 祐哉 (第五中 2年)
	6	後藤 奈穂美 (第六中 1年)
	7	神部 ちひろ (小金中 2年)
	8	田中 萌加 (常盤平中 1年)
	9	高梨 望 (栗ヶ沢中 2年)
	10	岸田 穰士 (六実中 2年)
	11	大山 祭 (小金南中 1年)
	12	渡邊 誠嗣 (古ヶ崎中 2年)
	13	梶浦 美樹 (牧野原中 2年)
	14	斉藤 温人 (根木内中 1年)
	15	富永 由也 (河原塚中 1年)
	16	石井 拓海 (新松戸南中 2年)
	17	中川 剛志 (金ヶ作中 1年)
	18	向田 美紀子 (和名ヶ谷中 3年)
	19	山本 ありさ (旭町中 2年)
	20	新倉 花菜 (小金北中 1年)
	21	田村 陽香 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	染谷 日向子 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成三十三年 度(二〇二一年)	1	佐藤 萌加 (第一中 2年)
	2	発地 空介 (第三中 1年)
	3	岸 健太 (第四中 1年)
	4	宗像 未来 (第五中 1年)
	5	天野 七海 (第六中 1年)
	6	紙崎 莉緒 (小金中 2年)
	7	井山 祥樹 (常盤平中 2年)
	8	加藤 円来 (栗ヶ沢中 1年)
	9	鈴木 理花子 (六実中 3年)
	10	坂本 実優 (小金南中 1年)
	11	谷口 茉奈美 (古ヶ崎中 1年)
	12	對馬 あい子 (牧野原中 2年)
	13	山田 真平 (河原塚中 2年)
	14	新垣 峻太 (新松戸南中 3年)
	15	水谷 春来 (金ヶ作中 2年)
	16	長谷川 結友 (旭町中 3年)
	17	板倉 日向子 (小金北中 1年)
	18	張 敏 (聖徳大学附属女子中 2年)
	19	平野 瑞帆 (専修大学松戸中 2年)

年度	No.	氏名 (学校名)
平成三十四年 度(二〇二二年)	1	阿部 秀大 (第一中 2年)
	2	茂出来 美樹 (第二中 3年)
	3	小澤 美羅 (第三中 3年)
	4	笠原 卓斗 (第四中 1年)
	5	播磨 渚生 (第五中 3年)
	6	内海 渚 (第六中 1年)
	7	大津 みちる (小金中 3年)
	8	小俣 さやか (常盤平中 1年)
	9	佐藤 優海香 (常盤平中 1年)
	10	阿部 裕美 (六実中 1年)
	11	宮本 龍一 (小金南中 3年)
	12	樋口 杏 (古ヶ崎中 1年)
	13	高橋 あみ (牧野原中 2年)
	14	遠藤 未羽 (根木内中 2年)
	15	後藤 陽 (河原塚中 1年)
	16	鈴木 里歩 (新松戸南中 2年)
	17	岩崎 いぶき (和名ヶ谷中 1年)
	18	伊藤 梢 (和名ヶ谷中 3年)
	19	紀藤 颯斗 (旭町中 1年)
	20	川村 香奈美 (小金北中 1年)
	21	石井 そら (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	中山 皓一郎 (専修大学松戸中 1年)



年度	No.	氏名 (学校名)
平成二十五年(二〇一三年)	1	藍原 由梨奈 (第一中 1年)
	2	河野 圭吾 (第二中 1年)
	3	福田 友郁 (第三中 2年)
	4	旗谷 幸亮 (第四中 1年)
	5	宮島 健吾 (第五中 3年)
	6	後藤 美菜 (第六中 3年)
	7	関川 美海 (小金中 2年)
	8	金澤 春樹 (小金中 1年)
	9	阿部 雅治 (常盤平中 3年)
	10	中澤 有稀 (栗ヶ沢中 2年)
	11	加藤 一紗 (六実中 1年)
	12	島田 悠 (小金南中 1年)
	13	大久保 愛深 (古ヶ崎中 1年)
	14	緑間 喜子 (古ヶ崎中 1年)
	15	毎熊 和正 (牧野原中 2年)
	16	猪瀬 柊斗 (牧野原中 1年)
	17	奥野 智朗 (河原塚中 3年)
	18	平野 茜 (新松戸南中 1年)
	19	下藤 誉司 (和名ヶ谷中 1年)
	20	新倉 拓真 (小金北中 1年)
	21	郡司 萌 (聖徳大学附属女子中 2年)
	22	星 さりあ (専修大学松戸中 1年)



平成26年度
平和大使長崎派遣事業報告書
～明るい世界に はばたく平和
未来に伝える 過去の願い～

松戸市
総務部総務課

平成26年12月発行